

非認知能力の概要



みなさんは非認知能力という言葉聞いたことはありますか。物事に対する考え方、取り組む姿勢、行動など、日常生活・社会活動において重要な影響を及ぼす能力を「非認知能力（non-cognitive skills）」と言います。一方、私たちがよく知っている IQ や学力といったテストなどで評価している能力は「認知能力（cognitive skills）」と言います。

非認知能力が重要視されるきっかけとなったのは、ノーベル経済学賞受賞者のジェームズ・J・ヘックマンらの研究チームが、幼児期の特別な教育が及ぼす影響について、社会的リターンをもたらしている要素は IQ テストで評価されてきた能力＝認知能力ではなく、IQ テストで評価されてきた能力以外の能力＝非認知能力であるとし、幼児期に非認知能力を育成することの重要性を経済学の立場から示したことです。この研究発表により、世界中で非認知能力に焦点を当てた様々な研究が行われるようになりました。OECD（経済協力開発機構）では、2015 年に非認知能力の定義を公表し、PISA（国際的な学習到達度に関する調査）にも反映しています。

日本では、各省庁がそれぞれの観点から、新しい時代に求められる能力概念の定義を行っており、その定義には非認知能力と解釈できる要素が多く含まれています。文部科学省は学習指導要領の中で、「育成すべき資質・能力の三つの柱」として、①知識および技能、②思考力・判断力・表現力、③学びに向かう力・人間性等と非認知能力育成の重要性を説き、能力向上の取り組みを進めています。経済産業省においては「社会人基礎力」を提唱する他、非認知能力成長支援ツールの実証や導入に補助金を交付するなど、官民が連携した動きも加速しています。

ここでは、非認知能力とはどのような能力なのかを掘り下げてみたいと思います。

Q:「非認知能力」とは、特別な能力なのでしょうか？

A:特別な能力ではありません

非認知能力について、これまで知られていなかった新しい能力、あるいは特別な能力だという印象を持たれる方も少なくないのではないのでしょうか。しかし実は、非認知能力とは私たちがこれまで重要と捉えて意識的に育成してきた能力や、日常的に習得してきた能力のことであって、特別な能力ではありません。例えば学校生活では修学旅行やクラブ活動だけではなく、日々のカリキュラムにおいても、生きていくために重要な力の育成が組み込まれていますが、これらは非認知能力の育成と捉えることができます。

チームで目標を達成するためには、自分の考えを発信するだけでなく、相手の事情に配慮し、自分とは異なる意見や提案を柔軟に受け入れたり、それらをじっくりと考え、時には客観的な立場からメリットやデメリットを予測することなども求められるでしょう。これは学校でも職場でも同じです。さらにトラブルが起きれば、何が原因なのかを考え、解決する過程で様々な工夫をする。挫折しそうになってもあきらめずにやり抜く。一方で、状況によっては、潔くあきらめて行動を切り替えることも重要です。たとえうまくいかなかったとしても、同じ失敗を繰り返さないためにはどうすればよいかを考え、失敗を糧にして前進することができれば、人は大きく成長します。

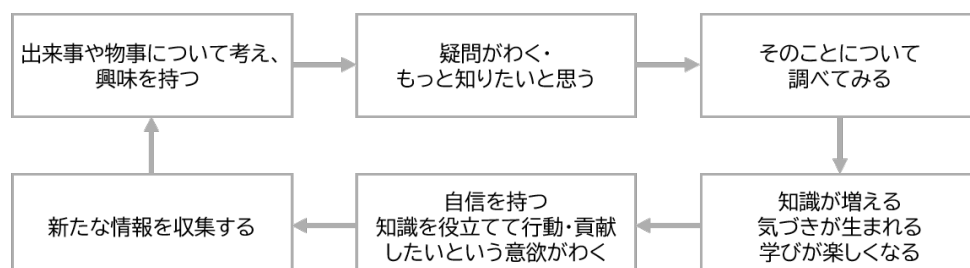
このような身近な経験の積み重ねの中で養われるものが非認知能力なのです。仲間と協力し合う経験だけでなく、一人で取り組むことにより育まれることもあり、発揮される場面も様々です。

Q:「認知能力」と「非認知能力」、どちらが重要なのでしょうか？

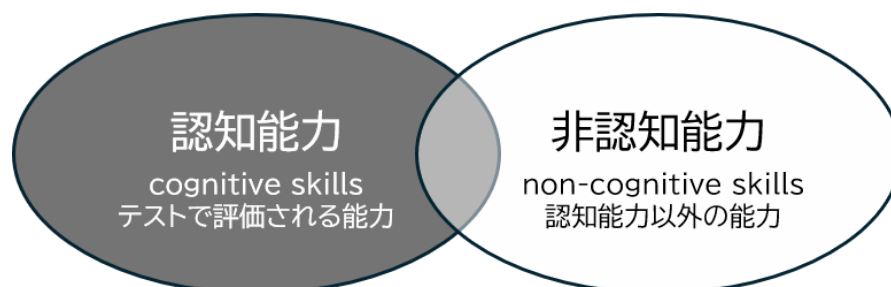
A:認知能力と非認知能力 どちらも重要です

冒頭で紹介したヘックマンらの研究チームは、テストスコアのみで測定した認知能力と、学問的な頭の良さや賢さへのこだわりが、人的資本介入の評価に深刻な偏りを引き起こしていると指摘しています。これは非認知能力に対する評価が過小であったことへの反省を込めて、評価対象として、これまで以上に非認知能力に着目すべきであることを意味しており、決して認知能力よりも非認知能力の方が重要であるとか、認知能力は必要ない、といった意味ではありません。

物事に興味を持つと疑問が湧き、調べてみると、知識＝認知能力が増えます。新たな発見があり、知識が増え、理解が進むと学ぶことが楽しくなります。学びによって自信がつき、知識を役立てたい、貢献したいという意欲が湧くと、さらに新たな興味や疑問が湧き、知識が増え、またさらに学びたいという学びの循環が生まれ、認知能力、非認知能力ともにより高次に発達していくと考えられます。



このように認知能力と非認知能力は密接に関わりながら高まっていくものなので、切り離してどちらか一方が重要と言えるものではないのです。



Q:「非認知能力」は、大人になっても育成できるものなのでしょうか？

A:大人でも伸ばすことができます

幼児期に非認知能力を育成することが最も効果的であるということは、多くの研究で取り上げられており、非認知能力は幼児期で全てが決まるという情報も見受けられます。認知能力と同じように非認知能力も幼児期において柔軟に吸収しやすいことは間違いないでしょう。性格もまた、幼児期にある程度形成され、その後容易には変化しないと言われています。性格＝非認知能力と捉えている研究もあり、この観点からは、大人になってからでは育成できないと言えなくもありません。

しかし、自分に不足している部分に気づき、周囲の人からの助言を受け入れ、他者の優れたところを吸収するなどして、考え方、姿勢、行動を変えていくことで、大人になってからでも伸ばせる能力はたくさんあると考えられます。アメリカの心理学者アンジェラ・L・ダックワースは、成功者に共通する GRIT（やり抜く力）の指標を提唱し、非認知能力は、大人になっても身に付けることができると言っています。

子ども向けのプログラムとしては、自制心・意思決定・コミュニケーション・問題解決のスキルを育成する SEL プログラム（社会性と情動の学習）が有名ですが、アサーショントレーニング（自分も相手も相互に尊重するコミュニケーショントレーニング）、アンガーマネジメント（自己の感情を理解し、怒りへの対処方法を身に付けるプログラム）、コンセンサス実習（合意形成を行いながら課題を解決する力を身に付けるプログラム）など、大人向けのプログラムも多数あります。

また経済産業省においても、人生 100 年時代に職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」を提唱しています。このように幼児期以降にも生きていくために重要な力の育成は大切であり、非認知能力の向上は一生継続することが出来るのです。